

## 指導者（保護者）として大切にしたいこと（その38）

～「70歳 ヤクザ監督 悩む」～

日

2022年6月吉  
U12部会広島地区  
SV 大庭 浩資

広島県バスケットボール協会U12部会広島地区の保護者の皆様、指導者の皆様、役員の皆様、いつもお世話になっております。

広島地区のコロナウイルス感染者は、ほんの少し減少傾向にあるとはいえ、まだまだ高止まり状態が続いています。

これから広島地区大会、県大会が控えています。

今後も（必要時の）マスクの着用、咳エチケットや手洗い、3密を避けるなどの対策をより一層徹底し、大会が無事に開催されることを願っています。

さて先日のスポーツ新聞に以下の記事が載っていました。

皆さんの中で、この野々村監督のことを知っている人がいれば、かなりの高校野球通、スポーツ通ですが、実はこの野々村さんは、私の大学野球部の大、大、大先輩です。

大学時代の武勇伝は数知れず、それはそれは豪傑だったそうです。野々村先輩は、大学で美術を専攻されており、昔、千田町にあった野球部の部室には、野々村先輩が描かれた、『俳優の高倉健が日本刀を持った絵』が飾られていたのを今でも覚えています。

野々村先輩は大学卒業後、高校教師、野球部監督となり、府中東高校で甲子園初出場。その後、ふるさと島根に戻り、開星高校で春夏通算9度の甲子園出場を果たしています。

毎年、秋に行われる野球部の納会でお話を聞くのが楽しみでしたが、コロナ禍の影響で納会が開催されておらず、この3年、お会いできていません。そんな中、この記事を見つけたので、ぜひとも皆さんに紹介したいと思いました。

高校野球がテーマですから、ミニバスケットボールの指導にそのまま当てはまるとは思いません。ただ、「ベテランの指導者でも、いろいろ悩みながら子どものために指導を続けていること」、「時代に合った指導をするということは本当に難しいこと」は感じていただけたと思います。

またいろいろご意見・ご感想を聞かせていただければ幸いです。

### 70歳 「ヤクザ監督」悩む

「ヤクザ監督」は健在だった。高校野球・開星（島根）の野々村直通監督（70）が復帰3度目の夏を迎える。70歳手前にして、異例ともいえる8年ぶりのグラウンド復帰。高校野球、教育現場の現状をどう感じているのか。口調はあの当時と変わらず、熱を帯びていた。

20年3月に8年ぶりに監督復帰。前監督の体制を一新するために学校に要請された。かたくなに拒否していたが、次の監督への「つなぎ」の条件で折れた。

今は違う。強くするために、腹をくくった。地元の生徒を軸にチームを作る理想がある。腰かけと思われると好選手は開星を選んでくれない。「3年後の進路も全力を尽くします。私は倒れるまでやりますので」と相手側に伝えるようになった。

春は県ベスト8で敗退したが「やるからには甲子園に連れていく。これからちょっと楽しみですよ」と自信をチラつかせた。

表情は柔和だが、情熱は燃えたぎっている。甲子園への欲を聞くと「ありますよ」と即答した。「春に負けて、悔しくて眠れない。何をしとるんやと」。

2010年のセンバツで21世紀枠の向陽（和歌山）に敗れ「末代までの恥。腹を切りたい」と発言。物議をかもし、辞任に至った。代名詞とも言える“事件”だが「確かに言わなくてもいい、乱暴な発言だったかもしれない。でもあれは俺の本音ですよ」とブレることはない。

厳しい指導者と知られた。甲子園の抽選会には羽織袴（はかま）。その風貌と、忌憚のない口ぶりから「ヤクザ監督」と呼ばれた。

厳しさは変わらないが、中身は変わった。「当然ながら手を出すことは一切しません。信念として変わらないのは、「子どものため」の1点だけ。成長させるためなら、エネルギーは惜しまない。

褒めて伸ばすことの難しさを感じているという。対角にある「しかる」意味がなおざりになっていないかと思う。

最近、練習試合で捕脱（ボールを後ろにそらすこと）した捕手を厳しく戒めた。「自分が要求した球種に、そんな反応しかできないのか。自分がサインを出したなら責任を持て」という内容。あまりの迫力に、相手校の旧知の指導者が「あんなに怒るんですね・・・」と驚いたという。

「どういう風に子どもたちを本気にさせればいいのか、と。褒められるとやっぱりうれしいでしょう。でも、何でもかんでも褒めたら今度はわがままになる。褒める効果は大事だけど、効果が半減する。彼らは褒められすぎているから。効果的にやるためにはしからないと。バットを振った、走った、だけで褒めていては意味がない。しかることは絶対に必要です」。

覚悟を持って指導に当たっている。だから、指導を受ける側にも覚悟を求める。

「昔は親も子も覚悟があった。覚悟してうちに預けてくれた。開星で野球をやる、この監督はこんな人で、何があってもついていくと、目標がハッキリしていた。だから野球に対しての集中力もあった。今はそれが無い。やはり、ギャップは感じますね」。

苦悩は多い。選手や保護者、学校と信頼関係を築きながら、令和の時代に合った道を探っている。一本筋が通っているのは「本気」の情熱だ。